

在りし日の先代方丈さまを偲んで

當山二世中興 大圓武志大和尚一周忌

平成十七年十二月十日、成寿山善光寺二世中興大圓武志大和尚の一周忌法要が横浜善光寺で執り行われました。この日は宗門関係者、壇信徒、親族などが善光寺に集まり、本寺光真寺住職黒田俊雄老師の導師により午後三時から釈迦殿で法要が行われました。大勢の僧侶による力強い読経のなかで、大圓和尚の在りし日の面影や数々の偉業を偲びました。

また、実兄でもある黒田俊雄老師や五十年来の友人でもある大乘寺山主の東隆眞老師、神奈川県第二宗務所第五教区前教区長、永明寺住職石田征史老師のこころ温まるご挨拶では、大圓和尚がすぐそこにいるかのように、いろいろな





場面を思い起こさせてくれました。

法要のあと、場所を客殿に移して、設齋が行われました。ここでは善光寺檀家総代、東郷敏氏のご挨拶が続いて、福巖寺住職新美昌道老師のご発声で献杯が行われ、参列者のみなさまはしばし、在りし日の大圓和尚の思い出に浸っていました。



願わくはもう少し生きていてほしかった

光真寺住職 黒田俊雄老師



昨年ここでお葬儀をいたしました武志方丈の死について話し合いが出来たら、と思っております。死したら、もう一周忌がまいました。歳月の早さ、人の命の儚さをしみじみと感じさせられます。思えば武志方丈は幼少の頃から、非常に個性が豊かですぐれた創造力をもっておりまし

た。この善光寺を開創し、仏道を通じて武志方丈なりの修行体験に基づいた仕事をさせていただき、武志方丈ならではの素晴らしい人生を送ったと信じております。

生前武志方丈自身も坊さんにさせて戴いた御縁を心から喜んでおりました。又立派な奥様に恵まれましたことは、武志方丈の人生で非常に有難い御縁であったと存じております。

武志方丈が日本の全国行脚を修行して悟った「無一物中無尽蔵」の信念をもって、タイ、米国等で修行した信仰体験から、この釈迦殿やお寺が出来たと思っております。留学僧に対する信念や人生観も自分の人生体験から生まれたもので、余人には出来ないような留学僧の派遣交流という念願も、立派に花開いたのであると思っております。又、武志方丈は「成せば成る。成さねばならぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり」との信念をもっておりました。この行跡

も彼ならではの個性に基づく独創的発想が具現化したものと信じます。

武志方丈の心中を思うとき、もう少し生きていて、やり残した仕事をしたかったのではないかと思います。しかし人にはそれぞれの寿命や役目があり、その使命を全うしたとき、速やかに仏の世界、お釈迦様の許に帰するものです。武志方丈は見事に、壮絶にその寿命を全うしたものと信じております。

一周忌の法要にあたり、檀家の方、ご信者の方々に心からお礼を申しあげ、武志方丈の心を心として今後とも、若い博志和尚をもり立てて下さいますよう、又善光寺が前にも増して興隆いたしますようお願い申しあげまして、本寺としての追悼の言葉といたします。



白純老師の誓願を受けて

大乗寺山主 東隆眞老師



ただいま、當山ご本寺の光真寺のご住職であり、大圓武志老師のご実兄でもある黒田俊雄老師の御導師のもとに一周忌の法要が行われました。私はしみじみと感じさせていただきながら、読経させて、供養させていただきました。

何かありましたら、また、ふと考えていると

き、「黒田さんに電話してみようかな、ちよつと意見を聞いてみようかな」そう思ったその瞬間に「ああ、あの人はもういないんだな」ということが、この一年間しばしばありました。また、あの人が亡くなったことが考えられない、信じられないという気持ちも私には未だにあります。今日、また、しばらくぶりに拝登して、黒田さんの写真を見たり、奥様や光真寺の方丈様、東郷さんとお言葉を交わしているうちに、黒田さんのいるときの雰囲気は蘇ってきました。「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」。黒田さんはよくこの歌を法要のときの香語に使っておられました。ただいま、また、光真寺の方丈様がここで復唱されました。いよいよもって、私は、黒田さんがここにいるなどしみじみ感じました。

私は昭和二十九年に總持寺に安居しておりますが、黒田さんの師匠でお父様である黒田白

純老師は、ちょうど当時の副監院さままでございました。その白純老師のお子様は七人とお聞きしていますが、そのお一人に前角博雄老師がおられます。アメリカに開教に行つて、アメリカ国籍を取つてアメリカ人となつて、アメリカ人のご夫人をおかれ、実質、アメリカの土になられた、そういうお方でした。今日、お見えになつている方のなかに、グラスマン徹玄老師がおられます。このお方も前角老師のお弟子になられて、前角老師から印可を受けたと聞いています。先年、黒田さんと前角老師の足跡を辿ったとき、マウンテン禅センターのご住職でもある徹玄老師が法戦式をなさつておられ、そこに出席させていただきました。前角老師はそういうふうにして新しいものをつくられていました。

黒田さんも善光寺の事実上の開創者であります。その弟さんの桐ヶ谷寺の黒田純夫老師も桐ヶ谷寺をどんだんだん大きくされました。

黒田白純老師のもう一人のお弟子、山形県出身の渡辺清光せいこう老師も何もないところから立派なお寺をつくられたと認識しています。

黒田さんも白純老師のそういう一つの方針、誓願を受けられていれると私は受けとめています。

善光寺を中心として、黒田さんのあとを受け継いで、博志さんとその関係の方がみんなで盛り上げて、黒田さんの「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、この香語の精神をますます發揮していただいて、日本仏教界、世界仏教界に活力を發揮されることを願つて止みません。

「身をけずり人に尽くさんスリコギの…」

神奈川県第二宗務所第五教区前教区長

永明寺住職 石田征史老師



先代方丈さまとの思い出といえ、私が教区長に就任した当時、たまたま他の寺で後継者をつくらなければいけないとき、方丈様が親身になりまして、その後継者を育成するということ、それも待ったなしの逼迫した状況で、時間がない。

それを関係者に声をかけて、ほんとうにすぐエネルギーに働きかけて、何とか無事に師匠の跡を継がせるようにさせていただきました。それが昨日のことのように思い出されます。

法要の席でも、初めてお会いしたお弟子さんに非常によく声をかけて、そんな場面が非常にありました。

今日は方丈さまの一周忌ということでほんとうに早いわけですが、写真真のようにニコニコと見ておられると思います。

博志様、ここには先代様の思いがたくさんあると思います。でも、私が思うのは「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、この言葉に集約されると思います。私たちが体現しなければいけないことだと思えます。五教区におきましても、また、それこそ五教区にとどまらず、これから若い人たちと一緒に協力しあって、活躍していただきたいと思えます。

善光寺の色を、博志方丈の色に

檀家総代表 中村治雄様



檀家を代表しましてお礼申し上げますと思います。本日は武志方丈の一周忌にあたりまして、大変立派な大勢のお坊さまにご参列いただき、無事一周忌を終えさせていただきましたことに、まず、お礼を申し上げたいと思っています。

私たち善光寺に来るたびに武志方丈のいない

ことの寂しさを痛切に感じておりました。しかし、そろそろ寂しさを感じているときではなく、なって来たと思います。先ほどもお話がありましたように、私は武志方丈が担って来た善光寺の色を、ぜひ、博志方丈の色に変えてもらいたい。博志さんのやり方を広げていく時代になっているのではないか。小泉改革の時代ではありませんが、また、仏教に改革という言葉が馴染むかどうかわかりませんが、基本的には直すところは直し、よい面は伸ばすという意味で、ぜひ、博志さんがこのお寺を立派なものに仕上げていったいただければ、よりありがたいと思います。

私ども檀家はそれをぜひ、応援していきたいと思っています。また、お出でいただきました多くの方丈さまにもご援護いただければありがたいと思っています。本日は誠にありがとうございます。

師父の偉大さを実感した一年間

博志住職のお礼の挨拶



本日は師父大圓武志大和尚の一周忌の法要にご焼香賜りまして、誠にありがとうございます。ご導師をお勤めいただきました光真寺の御前さま、大乘寺の東老師さまはじめ、日頃より善光寺を支えてくださる檀家檀信徒のみなみなさま、本日このように無事、一周忌を迎えるこ

とができましたこと、すべてみなさま方のおかげでございます。ただただ、深く深く感謝を申し上げます。

振り返りますと、あわただしい月日ではございましたが、師父の偉大さと周りのみなさま方のお心が身にしてみた一年でございました。寺の奥、不動殿に師父の遺骨と位牌と写真を安置しております。昼夜を分かつず、いまでも多くの方にお詣りをいただき、都度いろいろなお話をお聞かせいただきました。改めて師父の人となりが高く、それほど深く徹底した心尽くしであったのかと、改めて師父の偉大さに感じ入っております。師父は尽くしても尽くしても足りぬ気持ちで、それこそ命懸けで善光寺を築き上げ尊んできたことを、いまさらながら強く強く感じております。

先ほども東老師さまからお話がありましたが、師父が亡くなったあともなおそこに居ますが如

く永遠に生き続けていることを、今も胸の中に
しっかりと認識しております。この一年間、多
くの方々から励まされ、助けていただきました。
私はあまりにも未熟でございます。本日ご臨席
のみなさまどうぞ、今後ともご教導賜りますこ
とをお願い申し上げます、本日のお礼の挨拶とさせ
ていただきます。



設齋にて

大圓方丈を近くに感じて

檀家総代 東郷敏様



先ほどは莊嚴といいますが、素晴らしく肅しんまろく肅しんまろくたるご法要を拝見させていただきました。日頃拝したくても拝すこと叶わぬ素晴らしいものであったと感じさせていただきました。本当にあ

りがとうございました。

『成寿』の中に永平寺の監院、南澤禪師さまが大圓和尚を称して、八面六臂の大菩薩であると、書いてありました。八面六臂の大菩薩ということは、口八丁手八丁心八丁、すべてに通じたお坊さんであったと、大変なお言葉だと思いました。

また、清水寺の森貌下が突然、善光寺ご仏前にお一人お忍びでお詣りになり、森貌下さまにいろいろと山内をご案内したとき、おっしゃったことは「隅々にまで大圓和尚が彷彿としております」と、ひとりご仏前に坐して「人は熱血に惚れるといえます。私もまた熱血に惚れました。この方は清水寺の境内に大きな螢山禪師顕彰の碑を建てられました。このお方でない、できなかつたし、許さなかつたと思います」とおっしゃったのです。また、中外日報の形山局長は赫赫として光彩を放ち飛翔する熱球は突然

光芒を失い、闇の中へ消えたと、まこと美しい表現で大圓和尚を偲んでおられました。

その先住大和尚が亡くなるまで、私が褒めてほしかった方がおりました。が、ついに褒めずに亡くなってしまう。それはご子息、博志さんです。ご生前、お父様は「だめだ、だめだ」といって、今日の博志住職を一度も褒めなかったのです。

ところが亡くなられたあの瞬間から、翻然と翻り役割というか責任というか、今日のご挨拶にもあるように突然変わられたのです。大層立派なものを黒田武志方丈は遺しているんです。

ご本人を前にして言いにくいことなんですが、若いばかりのこの博志方丈、あんなに立派な挨拶ができるまでになっておいでなのです。そして、先住方丈さまが跡した『成寿』にコツコツと取り組んで六カ月。立派なものをここに表されました。



やはり息子は親がいるうちはだめなんです。させないで、できないと言う。今日はいろいろとご法要をいただきながら、黒田武志方丈を遠くに追い、いまなお近くに感じていました。これからも横浜善光寺を今日のみなさま方のお力でますます良き方向に導いていただきますように、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。